

そんなこと言われても

照井モト

六月十日の「時の記念日」は、大学時代からの親友、Tちゃんのお誕生日。少し遅れたものの、心ばかりのお菓子を送ったところ、数日後、三枚のさわやかな絵手紙が届いた。

絵をみて、「いいねえ」と思わずうなづいてしまった。

一枚目は、思わず食べたくなるような蕪の絵に添えられた言葉がまたいい。

〈朝摘みの瑞々しいのに感動し思わず描きました。毎年どこにいらしても誕生日のメッセージを有難うね。自重自愛で過ごします。〉

二枚目には、〈あなたの変わらぬ愛（友情）に乾盃します。〉黒の画面にワインカップを浮き立たせた趣向に思わずうなづいた。

三枚目、〈さわやかな庭のかしわ葉あじさいが咲

いてくれました。このひともとが私を慰めてくれます。近況リポートまで。〉

絵手紙のお礼を述べた電話の向こうで、彼女はきっぱりと言った。

「あなたは、ちよつとがんばり過ぎていると私は思うよ。もっとリラックスしてゆったり過ごさない。心配だよお。私はぜったい、あなたより長く生きるからねえ。そうでないと割に合わないから——」と。

定年後すぐに亡くなられたご主人に、今も想いを寄せておられるであろう彼女のいろいろあった人生を思い、その一言一言が身に沁みだ。

いつも少し肩の力を抜こうと思いつつ、日々の新聞に踊る文字を見ると、ついつい日本の将来に暗雲が立ち込めていることに焦りを感じてしまう。「教え子を再び戦場に送らない」と意気込んでいた頃が懐かしい。今は、孫達の将来がとても気がかりで、じつとしておれなくなってしまう。

五月十九日付東京新聞私説論説室の「不安が隔離されていく」という記事で、福島県双葉町民の男性（五十歳）が、『美味しんぼ』の主人公のよう

に鼻血が出た。心筋梗塞も患った。だが、国や県は、「安全」を繰り返す。鼻血が出たと相次ぐ訴えにも、「被ばくに因果関係はない」と言い切る。――と書いているのに憤慨し、あきれた。

私は、二〇一二年九月「食品と暮らしの安全基金」が主催する「チェルノブイリ視察ツアー」に参加。事故後二十六年のウクライナで、骨や血液等の小児ガンが増え、生存率は五十五パーセントに過ぎないことに衝撃を受けた。

放射能の怖さは、現在も深刻だった。原発から三十五キロの村から、事故から六年後突然村民全員が強制移住させられたコバリン村の元中学校長のミハイルさん宅を訪れた。

父親は九十四年に心筋梗塞を患い、奥さんは事故後八ヶ月後から甲状腺の手術を繰り返し、近々また手術の予定とこぼしていた。二児の母親である娘さんは、婦人科が悪く繊維筋腫。最近男孫と女孫も甲状腺腫の宣告を受けたと、夫婦で涙ぐんでいた。

心筋梗塞など心臓に異常が出るのは、放射能は臓器などの筋肉にも貯まるためだという。訪問した二校で、七割から八割の子ども達が、頭痛や足

痛、のどの痛み等、体の痛みを訴えていたのには驚いた。

帰国後、新聞の「県内の放射線量」の値に大ショック。岩手の子どもも危ない！なんとウクライナのその二校が、我が岩手県一関市、奥州市とほぼ同じ「放射線量」の学校だった。

ウクライナでは、ここ十五年来子どもたちの学力低下が大きな問題だという。甲状腺は脳に囲まれているので、甲状腺に取り込まれた放射能が脳を犯すから合点がいった。

「子どもが一人風邪をひいたら、即学校閉鎖にします」と話す校長先生に驚いたが、放射能で抵抗力が弱っている子ども達の実態を明確にした。

「健康な子は六パーセント」とウクライナ政府発行の健康白書が報告しているというから、放射能の恐怖は想像を絶するものだ。学習時間も十分ずつ短縮しなければもたないそうだ。

さて、『美味しんぼ』の「鼻血が出る」問題に戻るが、「食品と暮らしの安全基金」の二〇一四年三月号の「チェルノブイリ視察報告」によると、調査を受けた人の五十二パーセントが「鼻血が出る」と答えた村もあったそうだ。どの村でも学校でも

「毎日出る」「よく出る」人がいた。

「食品と暮らしの安全基金」のホームページ『放射能被害の新事実』（八ページ）には、ウクライナに住むタチアナさんの「三女オリガがひどい鼻血をよく出していたのが、放射能の高いキノコと川魚を食べない代わりに、放射能の少ない肉と牛乳を提供するプロジェクトに参加して四ヶ月後から鼻血が出なくなった」との談話が載っている。

タチアナさんは、二〇一三年十一月さいたま市、盛岡市、仙台市、郡山市、衆議院第一議員会館、ソウル市で講演された。

私は、『美味しんぼ』の作者を支持する。事実を書いて何が悪い。真実を教えてくれたことに、全国民は感謝すべきだと思う。

退職後、絵手紙の道具を用意したが、まだまだ絵筆をとる気になれないでいる。

母の膝枕

照井モト

明治三十年九月十日、上鱒沢に生まれた母サタは、同じ年の四月二十日生まれ父兼直と、隣同士の幼馴染の許嫁だった。母は、幼い頃の話を楽しみながらしてくれた。下隣のミナ子と三人でよく遊んだ。父は温泉みやげの太鼓を叩いて、二人を躍らせようとしたり。下隣のミナ子はすぐ踊り出した。母は笑ってばかりいて、なかなか踊ろうとしない。「おら、サタは嫁にしね。ミナ子がいい」と、よく言っていたと。

父は、長じて神楽の師匠に推され、太鼓の名手となった。幼い頃にそのルーツがあったのでは？とおかしくなる。

二人は、十七歳で結婚し、後に分家した弟夫婦とその子や両親との大家族だった。八十を越す祖母もいた。長男である父と母が築いた家庭は、農閑期の夜は村の若者達の神楽の練習、部落の八幡様のお祭りには神楽を奉納した後、馳走を振る舞

い、えびす講等、人寄せが多い家だった。泊まり客も多かった。接待の大鍋のカレーは圧巻だった。大きなボールでカレー粉を溶いていた。「宿は三分の損」と聞いたことがあるが、子供心に「十割の損だなあ」と思ったものだ。

母は、何十人も食事の準備を、実家の弟嫁のおばさん等の手伝いを得ながら、終始笑顔で行っていた。母が作るあんこ餅やくるみ餅、柿なますや煮しめ、手づくり豆腐と人参の白和えやお吸い物は自慢の味だった。近所の子ども達にも優しく振るまう母が自慢だった。義理人情に厚い父を支えて、いつも笑顔を絶やさなかった。

「天の岩戸開き」や、「鳥舞」等の神楽の舞いの披露や、謡曲師を招いての「浪花節の会」には、奥座敷、中座敷、出戸座敷の襖をはずした。その大広間に幕を張った舞台を、部落の方々と大勢で楽しんだこともあった。

綾織村と鱒沢村で七人の死者が出た、昭和二十三年のアイオン台風で、木造橋で県下一長い船渡橋が流されてしまったことがあった。猿ヶ石川を渡れなくなり、川向いの荒谷前駅のそばの上鱒沢小学校に行けなかった。そこで、橋を通らずに来

れる先生が、わが家で学校を開いてくれた。

母は、この時も三つの座敷を教室に開放し、座敷の東側、南側、北側の三方の縁側を廊下として、子ども達が自由に遊べるようにした。

とにかく、来客も泊まり客も多かった。特にも、両親の小学校の同級会には、泊まり客で賑わった。両親の恩師、氏家春松先生は、度々の同級会に招かれて釜石からおいでになり、何日もゆっくり泊まっていた。

岩手国体の折、グラウンドホッケーの会場だった沼宮内駅の駅長だった兄、多田喜直は、天皇陛下を先導するのに、タイムを計りながらホームを歩く練習をしたエピソードを持つ。その兄が、若い頃遠野駅や花巻駅の同僚の方をお連れしては、よく泊めていた。

私も、当然のように、中学の同級会を家で開いたり、地区懇談会でいらした中学校の先生方をお泊めしたりした。

夜、急にお客さんをお連れしても、両親は喜んでお迎えし、歓待してくれた。

後に、私が結婚して家を建てた時、床の間の違

い棚の部分に、教え子達の作品戸棚を作った。大工さんに、「何軒も先生の家を建てたけど、家の中の一番の所に、教え子の作品戸棚を作った先生は初めてだ」と驚かれた。今も分厚い学級通信や親子文集、子供達がくれた写真や画集でいっぱいだ。教え子達が家族でいつ遊びに来て、自分の作品が見れるようにしたいと思つてのことだった。

台所の食器棚には、三十人分ずつの、大中小各種皿やスプーン等を揃えて、教え子の集まりを家でもやれるように準備した。実際一年担任の親学会や、六年生の新年会を二、三度開いたこともあった。料理係、レクレーション係等、子ども達は喜んで企画し、実行した。

幼い頃にみた、両親の恩師を囲む集まりを、「いいもんだ」と思つていた記憶がそうさせたのだろう。時を経て、多くの食器は無用の長物と化していたが、平成十一年の震災には、被災された方々に喜ばれた。

母は、PTAが誕生して開かれた、小学校の全校参観日に、忙しい農作業の手を休めて、来てくれた。全校でたった二人の参観者だった。優しく

ほほ笑んでいる、鼻筋の通った美人の母が誇らしかった。

思えば、母に一度も叱られたことがない。「どの子も叱るような事をしなかったから」と、母は言っていたが、末っ子の私は、大変なことばかりやったものだ、今も思う。

ある日、学校から帰って、あんこ餅を食べようとした。台所の食器戸棚から、ギヤマンのような豪華な食器を取り出し、あんこ餅を盛って、立ったままで食べようとした。手をすべらせて、豪華な茶わんを割ってしまった。私が母だったら、大声でどなる所を、母は、「怪我しねがったがあ」と、優しく言っただけだった。行儀を悪くして済まない事をした。

暑くなると、昼ごはんや夕飯の前に、杉林から湧き出る「松原水」を汲みに行くのが、近所の子どもの達の仕事だった。ある夏の暑い日だった。松原水を汲みに行こうとしたが、いつものやかんが見当たらない。空の一升瓶を探したが無い。

仕方がなく、使いかけの一升瓶の中身を外の便所にドボドボ。すると、麦打ちをしている小屋から、「モド子何してるうー」と、母の声があった。母

が搾った七分目程あったジュウネ油は、殆んど捨てられた後だった。

この時も、母は叱らなかつた。母は、「家族に冷たい松原水を飲ませようとした、その思いが嬉しい」とほほえんだ。

まだまだある母の思い出。どれも叱られたよりも、鮮明に思い出されるから不思議だ。

母に喜ばれた思い出。農家の夕食は遅い。末っ子の私は、食べ終わると母の膝を枕によく寝てしまった。すると、祖母は決まって後片づけの前に「寝かせてこお」と言った。母は私の足を洗い、ぐったりした私を引きずるようにおんぶして床に連れて行き、寝かしつけてくれた。「お前のお蔭で休めるう」とほほ笑む母は、菩薩様のように思えた。私は、夢うつつのなかで、母のうれしそうな声を聞きながら、できるだけゆっくり寝つこうと思つた。